

ながら陸上自衛隊トップが語る内容は広範多岐にわたり、会場を埋め尽くした聴講者は熱心に耳を傾けていました。講演の締めくくりには、活発な質疑応答が行われるとともに、森下陸幕長から陸修偕行社の今後の活動に対する大きな期待が寄せられ、本講座は盛況のうちに幕を閉じました。

陸修偕行社安全保障研究委員会
は、引き続き安全保障等に関する調査・研究・提言及び普及に係る活動を積極的に展開していきます。

7月には、ホテルグランドヒル市ヶ谷において、岩田清文氏（元陸上幕僚長）、磯部晃一氏（元東部方面総監）、ローレンス・D・ニコルソン退役中將（元米国第3海兵遠征軍司令官）らにご参加いただき、安全保障シンポジウムを開催する予定です。皆様のより一層のご理解とご賛助をよろしくお願いいたします。

赤トンボ突入せり

「赤トンボ」とは、正式名は「九三式中間練習機」で、パイロットを目指す若鷺達が最初に搭乗する初等練習機です。機体はオレンジ色に塗装され、木枠に布張でプロペラも木製の複葉機です。また、エンジンだけが金属製で、時速は200^キ程度で低速で、操縦席には飛行に必要な最小限の計器しか装備されていませんでした。

太平洋戦争が始まった頃は、練習機の赤トンボを実戦に投入するなどということは狂気の沙汰であり、まったく想像だにしなかったのです。

沖縄戦で特攻機を使い果たした日本軍は、国体を保持したままの日本という国を何とか未来に繋げようと必死になり戦いの最後の抵抗を続けました。そして、国を護るため最後の望みをかけ、やむなく断腸の思いで赤トンボの特攻を決断しました。

特攻仕様の濃緑色に迷彩塗装された赤トンボ8機が「神風特別攻撃隊第3龍虎隊」として宮古島から出撃したのは、沖縄で地上戦が事実上終止符を打ち、日ならずして終戦を迎えようとする7月末でありました。

夜間、搭載許容量の5倍近い250^キもの爆弾を抱え、340馬力し

か出来ないエンジンを目一杯噴かして、あえぎながらやつとのことで離陸し、護衛艦も制空権・制海権もない漆黒の大海原に飛び立っていききました。

赤トンボ特攻機は、月明かりだけを頼りに沖縄本島西方の慶良間諸島まで海面すれすれの低空をただ特攻員の眼と耳と研ぎ澄まされた五感のみによる薄氷を踏むような危なっかしい飛行を続け、やつとのことで目標海域に到着しました。

そこには、アメリカが太平洋戦争で特攻機により最後に失うことになった最新鋭駆逐艦キヤラハン（排水量2500ト）が月明かりを受け悠然と浮かんでいました。

赤トンボ特攻機は、他の特攻機に比し著しい低速であり、かつ、木製布張りのためキヤラハンのレーダーに捕捉されることなく接近し、対空砲火も航空機に致命的な損害を与え、ることなく布張りを貫通したため、よろよろしながら、あれよあれよという間にキヤラハン右舷に激突しました。

このためキヤラハンは、弾薬庫の誘爆により船体が大きく裂け、火を噴きながら沈んでしまいました。他の赤トンボもキヤラハンの僚艦に突

入し、沈没には至りませんでした。致命的な損害を与える大戦果をおさめました。

防衛白書によりますと、宮古島には地对艦ミサイルが配備されました。このミサイルは、特攻隊員の敵艦を搜索する眼や耳、目標に突入させるための手足の代わりに、自ら飛翔して自ら目標を捉える慣性誘導、GPS誘導等の最新技術を駆使し、日本人の英知を結集して開発された極めて生存性の高い誘導兵器であります。

国を護る最後の手段とはいえ、練習機の赤トンボで突入しなければならなかった特攻隊員の無念を思うとき、台湾有事に南西諸島に押し寄せ、この地对艦ミサイルが切り札になることは、赤トンボで散った先人たちの思いに十分応えることになるでしょう。

南西の海に壮絶散華した彼らの国を思う崇高で純粹な愛国心は、令和を生きる人々に脈々と受け継がれ、世界に類を見ない2600有余年もの悠久の時を刻む素晴らしい瑞穂の国日本の歴史を更に積み重ね、未来へと継承される日本を愛する心の拠り所となるでしょう。